

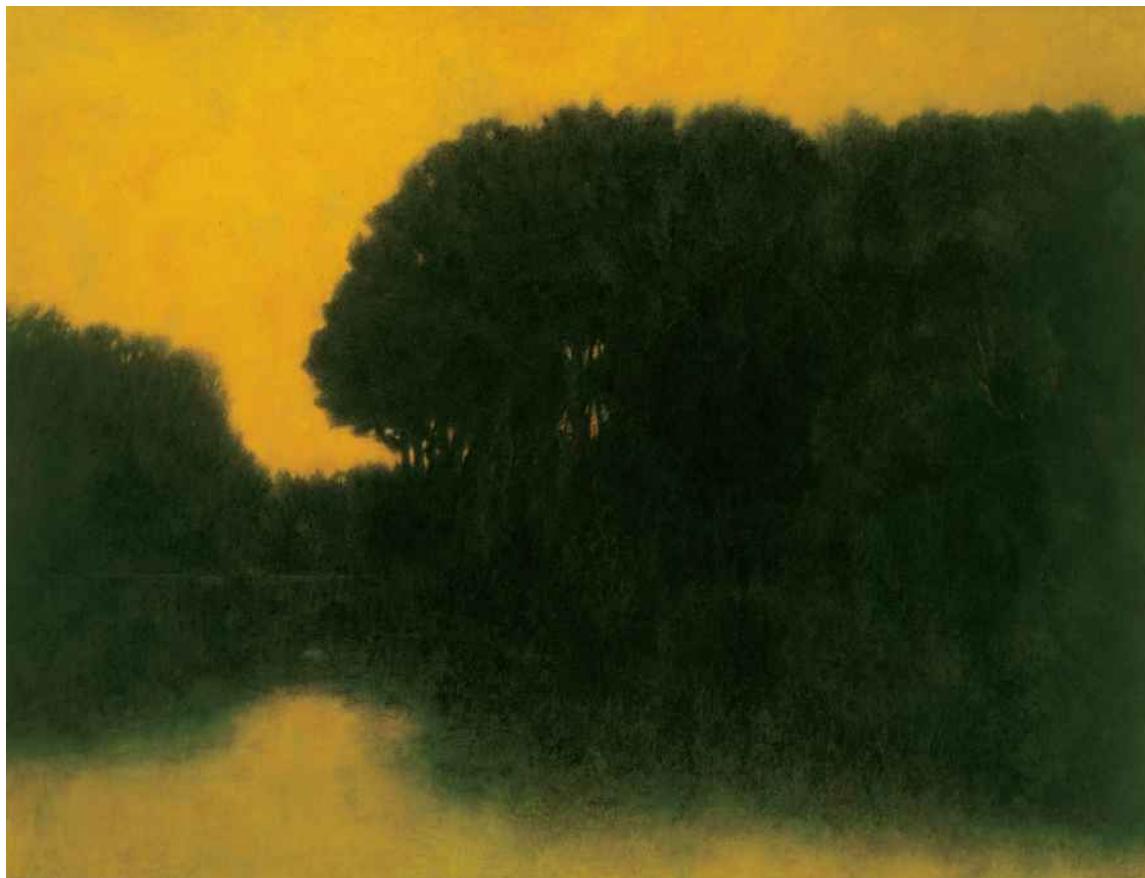
日展ニュース

No. 191

<https://www.nitten.or.jp/> 令和7年9月29日発行

編集兼発行人 神戸峰男

第118回 日展にむけて



燐 燐 鈴木竹柏

「第一一八回日展を開催するにあたつて」

日展理事長 宮田亮平



この度、第一一八回日展を迎えることは、この上なき喜びであります。又とても意義深いことと存じております。明治期に日本文化をより高めるべく文部省の主導の下開催された文展から、とどまることなく日本の芸術文化の向上のために発信し続け、そして今日に至っております。

ところで気候変動による今年の夏の異常気象、又、世界情勢の不安定など、心安らぐことなき日々となつてきております。この様な時こそ文化の力、芸術の力が重要な役目を担うと思つております。今こそ日展のなすべきことがあるのではないでしょうか。日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書の五科の作家の方々の渾身の作品によつて必ずや感動や安らぎ、ときめきの共鳴を呼び起こしてくれる会場となります。どうか皆様の温かいご理解とご支援を賜りますよう心からお願ひ申し上げます。

第一回日本美術展覧会実施内容

第一一八回日展 講演会・シンポジウム・映像による作品解説のお知らせ
・映像による作品解説等を本年度も左記の日程で開催いたします。

会期 令和7年10月31日(金)～令和7年11月23日(日・祝)
観覧時間 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで。)

入場料	○当日券	一般	一、四〇〇円
(税込)	○団体券(予約制)・前売券	一般	一、二〇〇円
	※団体券は20名以上。20枚購入につき招待券1枚進呈。		
小・中学生は無料。(ただし、入口で学生証のご提示をいたぐ場合がござります。)			
高校・大学生は無料。(入口で学生証のご提示をいただきます。)			
国立新美術館 東京都港区六本木七一二二一一二			



展覧会開催回数の表記について
日展は明治四十年（一九〇七年）開催の第一回文展（文部省美術展覧会）を礎とし、時代の流れに沿って帝展（帝国美術院美術展覧会）、新文展（文部省美術展覧会）、そして日展（日本美術展覧会）と名称を変え、昭和三十三年からは民間団体（社団法人日展）主催の展覧会として引き継がれ、多様な変革を重ねながら長い歴史を刻んできました。その歴史と伝統に鑑み、令和七年開催の日展より、明治四十年第一回文展からの通算開催回数に改め、「第一一八回日展」と表記することといたします。

開催日	講堂でのイベント
11月1日（土）	午後1時30分～3時30分（日本画）※途中10分休憩 映像による作品解説「自作を語る」 今年度受賞者（大臣賞・都知事賞・会員賞・特選） 映像による作品解説 今年度審査員
11月3日（月・祝）	午後1時30分～3時30分（洋画）※途中10分休憩 今年度審査主任と特選受賞者による座談会 今年度審査員と新入選者による座談会
11月8日（土）	午後1時30分～3時30分（彫刻）※途中10分休憩 「#彫刻の見方 十人十色」 第1部 第一～八回日展の見どころと特選受賞者「自作を語る」 今年度審査員 今年度特選受賞者 第2部 彫刻がわからなくとも楽しめる作品解説 石黒光二・紺谷 武・野村光雄・村山 哲
11月15日（土）	午後1時00分～2時20分（書）※途中10分休憩 特別講演会 日本画家 千住 博氏 午後2時30分～4時00分（工芸美術） 映像による作品解説 第一～八回日展 工芸美術の見どころ
11月22日（土）	午後1時30分～3時30分（書）※途中10分休憩 シンボジウム「日展の書」 (進行) 高木厚人 遠藤 強・倉橋奇伸・山本大悦・鹿倉碩齋・金子大蔵 作品解説「書」 有岡郊崖・岩村節蘆・日比野博鳳

「触れる鑑賞」プロジェクト

日展では、「触れる鑑賞」プロジェクトとして、作品（彫刻一部の作品）に触れて鑑賞していただける取り組みを始めました。

第一一八回日展 審査員・係

第四科（工芸美術）審査員 一九名
（外部審査員）

第一

係印—○

第一一八回 日展審査員 九五名

審査員長（理事長）宮田亮平

第一科（日本画）審査員 一九名

卷之三

美術評論家 清水康友

(会員) 池内 瑞美 加藤 晋 (理事) 福田 千恵 村居 正之

能島 千明 藤島 大千

(準会員) 石崎 誠和 辻野 宗一

第一卷（江漢）署宣員

世田谷美術館長 橋本 善八
川崎市岡本太郎美術館長
武藏野美術大学客員教授 土方 明司

筑波大学名誉教授	理事) 池川直能島征二 監事) 棗山賀行 会員) 早川高師 石崎義弘 片山伊庭 中原靖二 前芝博詞 岡本上田 吉岡篤徳 森田武史 田中ふみ 一成白石惠里 成和弘永子 徳高砂慎司 徹宮坂 正彦晴光
----------	--

第三科（雕刻）審查員
一九名

(副理事長) 黒田 賢一	(理 事) 高木 聖雨	(副理事長) 西高辻信宏
(会 員) 高木 厚人	遠藤 瘊	明石 真神
倉橋 奇艸	寺坂 鬼頭	巍 堂
中路佳保里	深瀬 翔雲	大宰府天滿宮 宮司
山本 大悦	昌三	大宰府天滿宮 宝物殿館長
石澤 金子	裕之	
桐雨 中村	史朗	
鹿倉 史朗		
碩齋		

第五科（書）審査員
一九名

(準会員)	(理事)
小畠 桜田	井隼 慶人
中久保	大樋 年雄
中田	上原 令吉
泰明 知文	利丸 満義
斉藤 繁昌	木谷 田中
清昭 晴之	陽子 照二
孝二	康二
三田村有純	河野 荻二

第四科（工芸美術）	
大樋年雄	河野榮一
田中照一	上原利丸
久保満義	角 康二
森田清照	小畠泰明
桜田知文	繁昌孝二
第五科（書）	
○真神巍堂	高木厚人
遠藤 弘	鬼頭翔雲
寺坂昌三	中路佳保里
山本大悦	石澤桐雨
金子大蔵	中村史朗
第六科（書）	
○明石聰濤	加藤令吉
倉橋奇峰	木谷陽子
堀 齊藤晴之	田中紀子
鹿倉碩齋	斎藤晴之
山内香鶴	菱子

第三科（彫刻）

能島千明	藤島大千	松浦丈子
安田敦夫	米田 実	石崎誠和
辻野宗一	村山春菜	山内登喜雄
倉林愛一郎	池田清明	石田宗之
菊池元男	○平野行雄	一の瀬 洋
加藤寛美	木原和敏	佐渡一清
西谷之男	錦織重治	福田あさ子

岐阜県美術館副館長

第一科（日本画）
也内章美

晉書

岐阜県美術館副館長
元 渋谷区立松濤美術館副館長

第一科（日本画）
池内璋美

晋
龟山祐介

日展解説会—作家の言葉に接する貴重な機会として

岡 泰正



「むかし東山魁夷先生と何度かお話をしたことがあるよ」などと言うと、若手の学芸員などは、シーラカンスを見るような視線を私に向ける。展覧会を担当した学芸員として作家と話すのは当然のことながら、その人が「歴史上の人物」に登録されると、肉声に接するということが想像しにくいのかもしれない。

その意味で、第九、十、十一回と三度の日展神戸展を担当した者として意義深かったのは、各作家自身が語られる「解説会」をセミナー室で開き、そのほとんどを聴講したことである。およそ一時間、三〇点ほどの画像を中心に一般来館者向けに出品作を解説されるのだが、作り手の言葉には、いわば生産者の苦闘や他者への敬意が息づいていて、感銘を受けた。十一回展では、会員中心で計十五回十八人の作家が担当された。平日ほぼ毎日である。五科それぞれの分野で、人気の先生の時は、入場待ち列ができ、八〇席が満席になった。

必ずどなたも自作の画像を最後に持つて来られ、照れながら話される。私は後方に席を

とつていて、皆さん謙虚だな、と感心しながら拝聴している。欧米の作家だとしたら、自分は自分のことしかわからないからと、フルに自作だけを語り続けるのではないか、と思った。自分で語る、これが貴重なのである。もっと描きこみたかったが、額装の引き取りが来るのを観念した。明るい会場で見たら、アラが目につき、やはり弱いところが目立つ、それはこの道の部分です、などと反省の言葉を洩らされる。聞いている方は、まったくそのように見えない。完全を期する作者にしかわからない秘密が聞けるのである。

私は美術工芸が専科だが、専門外の書の解説が何より新鮮であった。筆の運びを作家の体験からたどっていく。それは宇宙の星雲の流動を語るようであり、運筆の妙技を追体験するようなおもむきがあった。

いかにもつらそうに、おずおずと洩らされた、ある書の先生の言葉である。去年の夏は暑かつた、涼しい朝五時に起きて、制作を開始した。何も考えず筆を運んだ。「この歌はすでに七百枚は書いていて、どう崩すか、どこで始めるかは、頭にはいつていました、改行の部分は「ミリも動かせない強いこだわりがありました」ととにかく無心でした。その朝、書き始めた二枚目でした」。無心で生まれた出品作は、七〇二枚目ということなのである。私はあつけにとられて写されたスライドを見つめていた。この作品は、日展で賞を受けるのだが、作者の言葉を聞かなければ、制作の凄みは、少なくとも私はわからない。

自作を語るのは禁じ手、表現者は作品だけで勝負するものだ、というのが正論で、先生方のしぶしぶ感はよくわかる。解説者は、自作以外の作品は惜しみなく讃められる。特選の新しい

才能に敬意を表し、ともに喜ぶ気持ちが伝わって来る。会員、一般入選を問わず、新しい才能を求め、ひるがえつて自分に厳しくあるこの視点が日展を支えているのだと感じられる。

解説会のあと、必ず先生方は聴講者とともに作品の前に立かる。そこで出るのは、自慢ではなく、新しい表現の確認であり、技術への敬意である。五科すべて、理事の先生方ふくめ、ほとんどの作品が、もつとこうしたかった、これが足りない、しかしこはよく出来た、という反省と自信を封じ込めて飾られているのだと聞けるのである。

その時、私は思う。展示室内の平等―理事、会員、会友、一般入選も等しく展示された空間で、技術と才能を競いあつている。日本美術のスタンダードの今を提示し、内省を促すこうした伝統が、日展ではないかと思う。

岡 泰正（おか やすまさ）



一九五四年舞鶴市に生まれ神戸で育つ。関西大学大学院博士課程前期、美学美術史専修修了。一九八二年神戸市立博物館設立準備室に学芸員として勤務、展示企画部長を経て、二〇一五年から神戸市立小磯記念美術館、神戸ゆかりの美術館館長。博士（文学）。一九九四年第一回鹿島美術財団賞。著書に『めがね絵新考』（筑摩書房一九九二年第四回倫雅美術賞）、『司馬江漢』（新潮美術文庫十五一九九八年）、『日欧美術交流史論』（中央公論美術出版二〇一三年）ほか

山崎亮

幼い時から歴史が好きだった。国内外の歴史の人物に想いを馳せ、その生きざまに共鳴したり反発したりしながら、自らを歴史の中に投影することを楽しみにしてきた。本質的に人がなせる業に興味を抱いていたのだろう。人文学的な志向が自らにあることを感じてきた。

その後、縁あって成田山書道美術館に奉職して現在に至っている。有り難いことに美術の中でも大学で専攻した東洋史学と関係の深い、書の世界で仕事をさせていただいている。作家の内面が表し出する美術は、人文学の中でも最も人間らしさが出る分野の一つだろう。研ぎ澄まされた技法の中に各々の作品が発するオンラインの個の魅力を逃すまいと心に誓い、日々過ごす毎日である。

美術館で仕事をするようになり、日展を見学することは欠かすことが出来ない年中行事となつた。書の分野では多くの作家が日展を一年の集大成と捉えていて、話題となる作品も多く、当館にご寄贈いただいた多くの日展出品作も収蔵品の核となつていて。そのため、私は日展が始まると自らの美術史の一ページを新たに書き込むような気持ちで、展覧会を見学している。

私は日展を歴史学における「正史」のような存在だと考えている。

近代以前と、以降の美術の大きな違いは、大衆層の美術活動への参加だろう。かつての美術作品は、依頼者が作家に制作を依頼することにより生み出されるものが多かつた。従つて作品

は依頼者の意に沿う内容表現となる前提があり、鑑賞者も制作依頼が出来る富裕層とその周辺の人々に限られていた。一方、近代以降は多くの美術作品は展覧会へ出品された作品から生まれている。日展をはじめとした展覧会には誰もが出品することが出来、作家は自らの表現を自由に出すことが出来るようになった。鑑賞者もまた、作品を購入せずとも美術館という開かれた場で鑑賞することが出来るようになった。つまり、出自も境遇も異なる様々な立場の人々がそれぞれの角度から美術を楽しむことが出来る時代になつたのである。だが制作も鑑賞も自由になつた反面で、自由さゆえに作品を評価する一定の基準を人々が希求していたことも確かではないだろうか。

日展は官展に端を発し、長い間鑑賞者に美術に親しむ機会を提供し、また作家に制作への目標を示してきた。日展が各分野の美術をコンテストとして評価、判定することで一つの確固たる基準が出来、約一二〇年にも及ぶ長い間活動を積み重ねることで今のような存在感を得てきたのだと思う。

歴史学における「正史」もまた、長い間に多くの研究者が史料批判を行なつて校注を付け加えることでより「正史」として多くのものを詳しく伝える史料となってきた。私はここに両者の共通点を感じるのである。

私が日展に期待することは、今まで日展が示してきた道をこれからも変わらず示し続けていくことだと思う。日展が美術の基準を示すことで各分野の美術論に柱が出来、美術がより深く論じられてきた。それは日展のみならず、日展

外における美術活動においても影響しているはずである。美術論が盛んに交わされる世の中こそ美術もまた発展する。この存在感こそ約一二〇年にも及ぶ長い間、この国の美術界を牽引してきた日展の最大の魅力に違いない。今年も日展の開幕が近づいてきた。今から楽しみである。

山崎（やまとざき）あきら



一九七三年東京都に生まれ千葉県で育つ。立正大学文学部史学科卒業（東洋史学専攻）。一九九八年成田山書道美術館学芸員、現在、書道美術館学芸員、現在、同学芸係長。編著に『菅間コレクション 江戸時代の書 禅林墨跡を中心』（成田山書道美術館二〇〇八年）、『成田山書道美術館所蔵名品選 明治一五〇年の書道』（共編 芸術新聞社二〇一八年）、『赤井清美の仕事と明清の書』（共編 成田山書道美術館二〇二五年）などがある。

第一一八回日展 各科審査員より

記憶の中の日展

米倉正美（第一科 会員・審査員）



日展開催の頃、爽やかな秋風がひんやりと沁み入り、何気なくコートを着用していたこと。上野駅改札を出ると、黄金色に輝く銀杏の大木に迎えられ、舞い散る葉音までものが懐かしい。現在では気候変動や地球温暖化の影響で季節感すらもない。東京都美術館に到着し、緊張感の中エントランスへの階段を上るのが、父との秋の恒例行事となっていた。会場に一歩踏み入ると、寂とした中に床の軋む音と沓音が心地よく響き、ゆったりとした時間の中で作品鑑賞に浸つたことなど。今も鮮烈に記憶によみがえる。

やがて、その日展に出品する時が訪れる。初めて美術館の搬入口に降り立つた時の、あの緊張は現在も変わることなく続いている。初入選の感激が蘇る。更には審査員を拝命するまでに成長させていただき感謝の限りである。

今年もまた、この季節が巡ってきます。応募されてくる全ての作品と真摯に向き合い、目を張は現在も変わることなく続いている。初入選の感激が蘇る。更には審査員を拝命するまでに成長させていただき感謝の限りである。

今年もまた、この季節が巡ってきます。応募されてくる全ての作品と真摯に向き合い、目を

見るということ

辻野宗一（第一科 準会員・審査員）

絵は人となりを映す

村山春菜（第一科 準会員・審査員）



私はよく、都市や工事現場をモチーフにします。ビルや工場の多い東大阪で生まれ育った私にとっては、それが原風景だからだと思います。初めて特選をいただいた作品も高層マンションとビル群を描いたもので、タイトルも「郷」としました。自分の親しんだものや身近にあるものを、感じたまま、自分に素直に表現したいと日々制作を続けています。そのため、現場での写生を大事にしています。現場の印象を模写するぞという意気込みは、私の思う「日本画」にとって大事な要素だと考えています。

このたび、初めて審査員を拝命し、未熟な私に務まるのかという不安もあります。でも、描き手の生の「人となり」を感じることができると、絵に出会うことが楽しみでもあります。大学の恩師が、絵はその人が裸で立っているようなものだとおっしゃったことを思い出しています。審査員として、私の作品も私自身もすべて見られているという思いを改めて自覚し、身を引き締めて臨みます。



やがて、その日展に出品する時が訪れる。初めて美術館の搬入口に降り立つた時の、あの緊張は現在も変わることなく続いている。初入選の感激が蘇る。更には審査員を拝命するまでに成長させていただき感謝の限りである。

今年もまた、この季節が巡ってきます。応募されてくる全ての作品と真摯に向き合い、目を凝らし耳を傾け、作者の想いの詰まつた画面からの声を逃さぬよう、鑑審査にベストを尽くします。

これまで先輩方や多くの方々からご指導いただきました。そこはだけではなく、絵からも背中を押してもらい励みとなつてきました。また長い歴史の中でも先人たちが描かれてきた作品を見せてもらうたび、あらためて絵の素晴らしさに感動しています。絵は互いに影響を与えるながらより深く描かれてきているように思います。

時間をかけて思いを込めて仕上げた作品のなかには、それぞれの作品のストーリーが詰まっています。その作者の思いを感じ取ることがでできるよう気持ちをまっさらにして鑑審査に臨みたいと思います。

私はよく、都市や工事現場をモチーフにします。ビルや工場の多い東大阪で生まれ育った私にとっては、それが原風景だからだと思います。初めて特選をいただいた作品も高層マンションとビル群を描いたもので、タイトルも「郷」としました。自分の親しんだものや身近にあるものを、感じたまま、自分に素直に表現したいと日々制作を続けています。そのため、現場での写生を大事にしています。現場の印象を模写するぞという意気込みは、私の思う「日本画」にとって大事な要素だと考えています。

このたび、初めて審査員を拝命し、未熟な私に務まるのかという不安もあります。でも、描き手の生の「人となり」を感じることができると、絵に出会うことが楽しみでもあります。大学の恩師が、絵はその人が裸で立っているようなものだとおっしゃったことを思い出しています。審査員として、私の作品も私自身もすべて見られているという思いを改めて自覚し、身を引き締めて臨みます。

自分の世界があるかどうか

木原和敏（第一科 会員・審査員）



審査員を仰せつかり

佐渡一清（第一科 会員・審査員）

高田啓介（第一科 準会員・審査員）

第一一八回日展審査にあたつて

制作に写真を参考にする方が多いと思います。その前に、実物のモチーフと対峙して過去にどれだけデッサンやクロッキーを重ねてきたかが重要と思います。それが、モチーフを理解するための訓練になるからです。そこが抜けていると、写真を信じ切つて写すだけの行為になります。それでは、絵画として成立しません。

絵作りの際には、嘘をつかなくてはならない場面が多くあります。例えば、立体を平面にするには様々な捏造も必要になります。その時に、いかにモチーフを理解しているかが問われてくるでしょう。人物なら、量感、動き出しそうな臨場感、それを表せているか。緻密かどうかは問題ではありません。さらには、構図、バランスも含め、いかに絵画にするために工夫されているか。世界を作っているか。そのような点を基準として、審査に臨むつもりです。結局、絵の価値とは、世界観を見せられるかどうかだと思います。

この度、二回目となる日展審査員を拝命いたしましたして改めて身の引き締まる思いをいたしております。今回から展覧会の回数表示も第一回文展から通算しての第一一八回と表記されることとなり、その歴史の長さと重みに畏敬の念を抱かざるを得ません。それだけに、数多の立派な先生方の築いてこられた作品評価の精神を歪めることなく、良い作品の選出ができるように努めさせていただきたいと思います。

時代と共に今日、様々な芸術形式が存在する中、絵画を取り巻く状況も変化しつつあります。日展絵画はその中心として継続していますが、「不易流行」という言葉があるように、より魅力があるものとなさねばなりません。そのため、自らもより良い作品追求に研鑽を積み重ねていきたいと思います。



昨年公開された、画家が主役の映画「海の沈黙」（脚本・倉本聰、主演・本木雅弘）という作品で、私は絵画の担当をさせていただいた。ロケは北海道小樽を基点に約一ヶ月、東京ロケも二週間同行した。ハマナスの咲く海辺、切り立つ岬など朝四時に起こされ現場で描いた。十時開始のロケがどんどん迫る。焦る。重圧に押し潰されそうな日々だった。思えば今までああでもない、こうでもないと長い時間をかけて描いていたのは何だつただろうかと思えて来る。私はこの映画で随分勉強させられた。

この度、日展の審査を拝命してとても緊張している。絵画には具象もあれば抽象もある。皆、この日のために一生懸命描いて出品する。入選、落選の現実を思うと心が痛む。体調を整えしっかり良い作品を見逃す事なく審査に臨みたい。

苦しみと楽しみ

伊庭靖一（第三科 会員・審査員）



「小学校や中学校の頃にとても楽しかった図工や美術を教える先生になりたい。」という気持ちで教育学部への入学を決めたのが当時の自分でした。そこで「彫刻」との出会いがあり、何も解らないままのスタートから師や仲間との出会いにも恵まれ、その魅力に気づきのめり込みながら六五歳の今になるまで制作を続けてきたのが今の自分です。

教員であった自分が今まで制作を続けられたのは日展という公募展の存在があればこそであつたと思っています。

人が人の形（ヒトガタ）をつくる意味を考え、その形の中に立体造形としての美しさだけでもなく精神性をも詰め込みたいと日々もがいています。そのことは今の自分にとって苦しみでもあります。この上ない楽しみでもあります。

今年は、歴史ある第一一八回の日展において審査員を拝命することとなりました。それぞれの作家が自身の制作活動を通して作品の中に詰め込みたいと考えた願いや思いを同じ作家としてしつかりと受け止め審査にあたつていきたいと思います。

日展との出会い

二塚佳永子（第三科 会員・審査員）



日展に応募するきっかけは人それぞれですが、会場に作品が展示された時から出品者には、かけがえのない喜びと尽きない苦悩の世界が開かれます。

審査に臨みましては、日展の伝統と新しい可能性を感じれるよう真摯に作品に向き合つていただきたいと存じます。

このたびは、日展審査員を拝命いたし身の引き締まる思いでいっぱいです。自身の作品も含めて審査員としての重責を思い、緊張感が日に日に増してきています。

思い返しますと、私の日展との出会いは日展金沢展でした。初めて会場の入口に立つた時の、華やかに煌めく情景が忘れられません。こんな世界があるのだと圧倒されてしましました。この出会いから、無謀にも日展に入選したいと思うようになり、その後は、幸いにも日展の多くの諸先生方に育てていただき、今日に至っています。

拾われたものの責務

岡本和弘（第三科 準会員・審査員）



このたび、第一一八回日展の審査員を拝命し、誠に光栄に存じます。その榮誉に喜びを覚えると同時に、重責を担う身として心を引き締めております。

思えば、幾度となく落選を重ね、最後の機会と覚悟して制作に臨んだ作品が入選し、以来今まで制作の道を歩んでまいりました。今振り返れば拙い作品ではありましたが、その中にも何かを感じ取つていただけたことが、私にとっての出発点であり、作家としての背骨となりました。

今回の審査に臨むにあたり、かつての自分のように、零れ落ちんとする作品を見逃すことのないよう、一点一点に心を尽くし、真摯に向き合う所存です。拾われた者としての感謝と自戒を胸に、作家の熱意と可能性を正しく見極める、公平かつ誠実な審査を心がけたいと存じます。

木谷陽子（第四科 会員・審査員）

第一一八回日展の審査にあたり思うこと

田中紀子（第四科 会員・審査員）

審査にあたり

繁昌孝二（第四科 準会員・審査員）



令和六年能登半島地震の震災後、三月末に避難所を出て自宅の片付けと応急修理日々。少しづつ仕事も再開し、作品も手掛け始めた九月。裏山からの土石流が引戸を突き破り、流れ込んだ大量の土砂に、制作途中の作品の出品は諦めるしかありませんでした。復旧作業のなか、ふと頭をよぎるのは、「この先どのくらい作品を作れるのだろうか」「描きたい画をどれだけ実現できるだろうか」「中途半端に終わつた作品に再び挑む時間はあるだろうか……」そんな事を思いながらの土砂の撤去でした。

そしてやっと作品を出せるようになつた本年、思い掛けず二度目の審査員を拝命する事になりました。日展に出品してきた中で多くの先生方から「審査に向かう姿勢」も学ばせて頂きました。「出品者への敬意を持つて真剣に向き合い『美術に誠実』である事を忘れない」。心の奥にその姿勢を保てるよう努力し、未熟ながらも責務を果たし、幸運にも創作活動に戻れた人生をありがたく思い、悔いなく創つていこうと思つています。



近年の美術界を観ていると国の中内外を問わず、従来の考えでは想像もしない作品が発表されています。工芸の世界に於いても同様で随分考えさせられ、つい浮足立つてしまいそうになります。しかし、そこで立ち止まり自分の立ち位置を考え、一一八年続いた日展の魅力を今一度考えることも大事なのではないかと思います。

日展の工芸美術には様々な素材や技法があり、また表現方法も平面や立体等多岐に亘っています。一方では他分野だと思われていた作品が工芸部門に堂々と認められているのも現実です。私が携わっている染織の場合どうしても平面的な見方になりがちですが、立体作品を見て違った角度からの表現を生かせたら作品に深みや幅が出来るのではないかと思っています。

工芸美術のそれぞれの特性を最大限に生かし、個性豊かな素晴らしい作品が会場に勢揃いすることを期待します。

今年度の日展新審査員を仰せつかり、感謝の気持ちと共に責任の重さに身の引き締まる思いをひしめいています。

日展に出品するようになり三五年が過ぎました。初期の頃は、どのような作品を作れば良いのかもわからず手探りの時期だったと思います。十年位経つと、それまでより造形の幅が広がり、特に原型を粘土で作る作業がワクワクしてきたように思います。そして近年は、自然界の物や事象をモチーフにしつつ、それを見て感じる自分の心の想いを作品に乗せて制作するようになりました。

今回の審査にあたつては、出品者それぞれが作品に込めた熱い想いをしっかりと受け止めながら、真摯に取り組みたいと思います。その上で、工芸素材の質感表現、独創性や新規性、平面作品の構成および立体作品のフォルムの在り方の審美性、技術・技能等、しつかり注視していくたいものです。そして、日展の工芸美術がさらに発展していくための良い展示になるように！



しぎかんが問われる立場で

鬼頭翔雲（第五科 会員・審査員）



第一一八回日展審査員を委嘱され、その任の重さに身の引き締まる思いをしております。五科の入選率は毎年一割という極めて厳選であります。私は若い頃から一年は日展で始まり日展で終わるという思いで書生活をしてまいりました。年間、多くの書展で活動をしながらもその核には常に「日展作品」ということが頭から離れません。おそらくこの思いは日展出品者は誰でもそうかもしれません。その作品は日頃の弛まぬ努力と精進を集大成したものであり、正しく「心技体」つまり技法のみならず筆意の裡には鍛錬、精選された人格と生命力が宿つているといつても過言ではありません。

毎年、選外作品の中にも優れた作品があります。その違いは紙一重の差かも知れません。入選率一割の厳しさはそういう所にあるのでしょうか。そして審査員の識鑑を問われるということも事実です。出品作品に最大の敬意をはらい、その任を果たしたく考えております。

応募者の願いに

思いを馳せながらも公正な審査を

寺坂昌三（第五科 会員・審査員）

「一生に一度
でいいから日展
に入選したい。」
多くの応募者
に共通する願い
です。



合評会でのこ
とです。何人か
の方にアドバイ
スしましたが、

筆遣いについて
はうまく伝えら
れません。「後
で書きながら説
明しますね。」
という約束をしました。
説明を始めると周りにいた人も集まって来ま
した。「ここはどう筆を運べばいいですか?」「も
う一回書いてください。」等、皆さん熱心です。
その場面を写真に撮った人がいて、見るとそこ
にいるほとんどの人が前のめりになつていま
す。意欲が姿勢に表れているのです。

「書を深く学びたい。技術を身に付けて
できることがなら入賞・入選したい。」みんなそ
う願いながら制作しているのです。
日展審査員という榮誉を賜り感謝申し上げま
す。審査にあたっては、一作一作に込められた
願いに思いを馳せながらも情に流されることな
く、客観的で公正な審査をしていきたいと思いま
す。

新審査員として

鹿倉碩齋（第五科 準会員・審査員）

この度、第一一八回日展において審査員とい
う大役を拝命し、身に余る光榮であると同時に、
その重責に身が引き締まる思いです。

「書家になる」と覚悟を決めた学生時代、そ
の先にある目標は日展でした。自分の思い描く
未来には、日本最高峰である日展は欠かせない
憧れの存在がありました。かつては、日展に挑
戦することすら叶わず、出品しても落選を繰り
返すという厳しい現実。たとえ入選しても、そ
の喜びも束の間、常に自作と対峙し、反省と試
行錯誤を重ねる日々が続きました。日展を通し
て、作品を生みだす苦しみ、突き抜けた時の喜
びを体感する日々は有難いことに自分の人生に
彩りをもたらしているように感じております。



今後も、諸
先生方のご指
導を仰ぎながら
更なる高み
を目指して邁
進していく覚
悟です。

審査員とし
て、公正かつ
真摯な姿勢で
文化を未来に
繋ぐ一助とな
るよう誠心誠
意、責務を全
うしたいと考
えております。

♪夏休み一日ART体験♪

第20回 ワンデイアート「Oneday Art」レポート

連日の猛暑の中、日展会館のイベントスペースで、「第20回 Oneday Art」が開催されました。

今年は初参加の方も多く、大人と子供、あわせて270名の方が参加してくださいました。作品展もたくさんの作品が並び、スポットライトを受けて輝く自分の作品に、驚きと喜びの参加者の表情が印象的でした。

作品展の様子は公式サイト（子ども日展ページ）で紹介、共同制作は、パブリックスペースや国立新美術館の日展会場で展示を予定しています。

『指導作家』

7月19日 工芸美術（漆）

青木宏憧 川口 満 武田 司

繁昌孝二 山口和子 斎藤卯乃

林 香君

7月20日 書

井上清雅 締引滔天 植松龍祥

岩井秀樹

（オブザーバー）高木聖雨

（サポート）尾花太虚

滑田耀齋 松浦龍坡

増川雪子



7月26日 彫刻

吉岡 徹 寺山三佳 廣川政和
堀内有子
(オブザーバー) 山田朝彦
(サポート) 鈴木紹陶武 安田陽子
永江智尚 境野里香 宮地淑江

能島浜江
(オブザーバー) 米谷清和
(サポート) 新川美湖 安田敦夫

亀山祐介 岩田壯平 川田恭子
前田潤 茅野吉孝
(オブザーバー) 佐藤 哲

7月27日 日本画
能島浜江
(オブザーバー) 片岡世喜 菊池元男
佐藤祐治 田中里奈 田辺知治
前田潤 茅野吉孝
(オブザーバー) 佐藤 哲

桑原富一 片岡世喜 菊池元男
佐藤祐治 田中里奈 田辺知治
前田潤 茅野吉孝
(オブザーバー) 佐藤 哲

8月3日 洋画
桑原富一 片岡世喜 菊池元男
佐藤祐治 田中里奈 田辺知治
前田潤 茅野吉孝
(オブザーバー) 佐藤 哲

桑原富一 片岡世喜 菊池元男
佐藤祐治 田中里奈 田辺知治
前田潤 茅野吉孝
(オブザーバー) 佐藤 哲

8月3日 洋画
桑原富一 片岡世喜 菊池元男
佐藤祐治 田中里奈 田辺知治
前田潤 茅野吉孝
(オブザーバー) 佐藤 哲

賛助会員制度 《日展パートナーズ》
(掲載希望者のみ 令和7年8月末現在)

●個人
吉岡徹 寺山三佳 廣川政和
堀内有子
(オブザーバー) 山田朝彦
(サポート) 鈴木紹陶武 安田陽子
永江智尚 境野里香 宮地淑江

東晋一郎 様 新井演子 様
飯田真未 様 石崎國夫 様
井谷善恵 様 井上道守 様
今田功一 様 今村忠司 様
岩田 薫 様 梅崎 壽 様
梅澤真那 様 角井 博 様
梶山純子 様 兼重勇希 様
菊池和久 様 栗原直子 様
吳 祐輔 様 黑田浩平 様
児玉安司 様 近藤禎男 様
坂本美賀子 様 佐川かおる 様
澤井和行 様 高木寛史 様
田頭益美 様 高橋千笑 様
竹尾明子 様 中室里恵 様
田中宏欣 様 土屋礼央 様
寺岡宏高 様 竹本葉子 様
西田俊通 様 西村潤帰 様
西村友子 様 野田裕一 様
藤田理恵子 様 一般財団法人 ビオトピア財団
宮島幸男 様 福井素鳳堂 様
森嶽順子 様 有限会社 みなせ筆本舗
株式会社 リンクス 様
株式会社 和光 様

株式会社 IDホールディングス 様
株式会社 大垣共立銀行 様
岡崎信用金庫 様
株式会社 玉蘭堂 様
謙慎書道会 様

一般社団法人 光風会 様
公益社団法人 創玄書道会 様
株式会社 高山草月堂 様
株式会社 千葉銀行 様
株式会社 筑波銀行 様

T & T パートナーズ 法律事務所 様
一般社団法人 東光会 様
株式会社 西文明堂 様
株式会社 筑波銀行 様

株式会社 東洋額装 様
株式会社 創玄書道会 様
株式会社 千葉銀行 様
株式会社 筑波銀行 様

株式会社 東洋額装 様
株式会社 西文明堂 様
株式会社 筑波銀行 様

株式会社 創玄書道会 様
株式会社 千葉銀行 様
株式会社 筑波銀行 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

株式会社 原汲古堂 様
ニユーカラー写真印刷 株式会社 様
株式会社 原汲古堂 様

作家人生——私の仕事——



《猫、磊悟隣の夢》
(平成21年 第41回日展出品作)



《ソロモンの指輪》(平成元年 第21回日展出品作)
日展会員賞



《私と猫》
(第1回日春展出品作)



《康枝夫人と九匹の猫》
(平成24年 第44回日展出品作)

庭の枝垂れ桜の満開の日に、夫が亡くなりました。夫を亡くし暫く絵から離れようと思つて居た私に、奥田元宋先生が、あの大きな瞳で「日展の作品を描けよ、もし君の絵が無かつたら僕は君を許しませんよ!!」とまで仰り励まして下さいました。真底私の事を心配して下さった先生方が皆亡くなり、愛する両親も姉兄弟も亡くなり、大切な友人も亡くなり、可愛い犬も猫も亡くなり、耐え難い淋しい日々を悶々と過ごしている私は、「諸行無常」が大嫌いな言葉です。

無常のこの世

第一科日本画 会員 田 島 奈須美

私は文士の父に憧れ童話作家を志していました。我儘で団体生活の苦手な私は小学校から学校に通う事はいたしませんでした。心配した両親がお願いした、お稽古事や勉強の先生も私の我儘に呆れ、仮病を使い、いらっしゃらなくなる事態でした。そんな私が二十歳を過ぎた頃、ひょんな事から日本画を学ぶ事になり、最初の先生は、伊東深水先生と御子息の万耀先生です。お二人の先生は「作品は自分の分身です、命を懸けて描きなさい」と申されました。生まれて初めて一生懸命する仕事に不安になり、幼い時から、可愛がつて下さっていた、慶應義塾の高橋誠一郎先生に相談すると、高橋先生は「それならば月に一、二度、僕の所に来なさい」と仰いました。先生の所にお伺いすると沢山の浮世絵を見せて下さったり、福沢諭吉先生の事など、私の為になるお話ををして下さり、時には歌舞伎にもお連れ下さいました。その後、万耀、深水先生が相次いで亡くなり、高橋先生の推薦で、私は、橋本明治先生の門下生となりました。橋本先生は「君は先輩の画家や僕に憧れてはいけません」と常に仰り、橋本先生の亡き後、高山辰雄先生は「貴女は絵の勉強などしてはいけません、只いつも絵とは何だらうと考えて居なさい」と仰いました。



扁額 《和樂》 目比野五鳳



《墨染》(平成28年 改組 新 第3回日展出品作) 内閣総理大臣賞



昭和三十八年頃 市川実家にて
日比野五鳳先生と本人



《雲の秋・菅裸馬》 (令和7年 現代書道20人展出品作)



原点

第五科書 理事 土橋 靖子

千葉県市川市に生まれ育つた私の家には、私が幼い頃、母方の祖父で後に師となる京都の日比野五鳳先生が、上京の折、よく泊まりに来ていました。どこか古武士的な厳しさもありますが、私たちにはいつも穏やかで優しい祖父でした。そんな縁もあるのでしよう、私の家には、物心ついた時から祖父が書いた扁額「和樂」が鳴居に掛かつていました。もちろんそれが何なのか、当時はわからないまま、日常の中に同化しつつ、当たり前のようないつもそこにありました。

それから中学・高校一貫校に進学し、そこで書の恩師・樋崎華祥先生と出会い、またそれがきっかけで、あらためて中学二年から祖父に書の手解きを受けるようになりました。さらにそれから進路を書と定め、東京学芸大学に進学、専攻科を経て日展には二十歳で初入選を果させて、ござきました。

書の道にひたすら進むうち、何年か経つて実家となつた市川の家に寄り、五鳳先生の扁額をあらためて見た時は、懐かしさと共に、一見何の変哲もないと思っていた書の、技術を昇華した清らな精神性の高いそのすばらしさにやっと気づきました。平安時代の一見脆弱にも見える「和洋の書」に抗うような、凛とした「日本の書」の一つの姿とも思いました。

五鳳先生からは数多くの言葉をいただきましたが、中でも「書にはその人の人生観・世界観が現れる」と言われた事が今も胸

は強く残っています。書の古典・古筆を常に体の一部に据えながら、それを昇華し、自分らしく、豊かなイメージをもつて再表現してゆくのが書だと思っていますが、自分磨きをしてこそ、

祖父の扁額「和樂」は、現在、実家から自分の家のアトリエに移し、私は日々またその下で筆を持つています。

常に筆を紙に突き立てて強さを内に隠した線、街もなく、清らで侘び寂びに通ずる味わいある風情、これこそが祖父の人生観そのものなのでしょう。

この書は、時として寄り道をしたり迷い道をしたりする私を叱咤してくれます。まるで、古武士姿の着物の五鳳先生が上から見守つてくださるかのように…。

五鳳先生のこの扁額「和楽」は、私の書との出会い、そして原点です。

刊行物のご案内

第二科『日展の洋画』

オールカラー 約一四〇頁
表紙 小瀧一紀（出品作・予定）

日展会館（本館）の貸しスペース
スはギヤラリー・会議室・教室と
して、ご利用いただけます。
（利用に関する問い合わせ）
公益社団法人日展 施設管理係
電話 03（3821）0453

第三科『日展の彫刻』

オールカラー 約五〇頁
表紙 山田朝彦（出品作・予定）

（第一回から三回まで）
日展会館（本館）の貸しスペース
スはギヤラリー・会議室・教室と
して、ご利用いただけます。
（利用に関する問い合わせ）
公益社団法人日展 施設管理係
電話 03（3821）0453

第四科『日展の工芸美術』

オールカラー 約一二〇頁
表紙 春山文典（出品作・予定）

（第一回から三回まで）
日展会館（本館）の貸しスペース
スはギヤラリー・会議室・教室と
して、ご利用いただけます。
（利用に関する問い合わせ）
公益社団法人日展 施設管理係
電話 03（3821）0453

第五科『日展の書』

（第一回から三回まで）
日展会館（本館）の貸しスペース
スはギヤラリー・会議室・教室と
して、ご利用いただけます。
（利用に関する問い合わせ）
公益社団法人日展 施設管理係
電話 03（3821）0453

- 定価 各三、五〇〇円（税込）
○令和7年11月5日発行予定
○東京会場の全陳列作品図版・目録を収録（作家名・作品題名の読み仮名・英訳付）
○全作品に作品寸法、工芸美術には技法を表記
○審査所感、授賞理由ほか諸資料
○A4判変型

第一科『日展の日本画』

- オールカラー 約一五〇頁
○表紙 渡辺信喜・小瀧一紀・山田朝彦・春山文典・土橋靖子
（出品作・予定）

第一回日展図録

（五部門五分冊）

日展作品集・図録 (バックナンバー)

左の先生方が逝去されました。
謹んで哀悼の意を表します。

※在庫が僅少の回もございますので、お問い合わせください。

（問い合わせ先）
〒110-0002
東京都台東区上野桜木2-4-1
公益社団法人日展 出版物係
電話 03（3821）9543

第一科『日展の日本画』

- オールカラー 約七〇頁
表紙 渡辺信喜（出品作・予定）

日展会館（本館）利用案内

編集後記

今号の主な内容は、「特別寄稿」として、岡泰正先生と山崎亮先生に、日展への思いや日展の歴史と魅力について執筆くださいました。また「作家人生—私の仕事」では、田島奈須美先生（日本画）と土橋靖子先生（書）に、芸術を志したきっかけとなつた恩師への思い出などを寄稿していただきました。さらに、今年度の日展審査員から各科三名の方に、審査にあたつての思いを述べていただきました。

日展は、今年度から開催回数を「第一回日展」と表記するようになりました。一回は明治四十年第一回文展からの通算開催回数ですが、開催回数から歴史の重みを感じずにはいられません。今後さらに日本美術の作家のみならず、理解者や愛好家が一人でも増えることを切に願っています。（山本）

（第一回から三回まで）
日展会館（本館）の貸しスペース
スはギヤラリー・会議室・教室と
して、ご利用いただけます。
（利用に関する問い合わせ）
公益社団法人日展 施設管理係
電話 03（3821）0453

（第一回から三回まで）
日展会館（本館）の貸しスペース
スはギヤラリー・会議室・教室と
して、ご利用いただけます。
（利用に関する問い合わせ）
公益社団法人日展 施設管理係
電話 03（3821）9543

編集委員 亀山 祐介 西田 真人
　　浅見 文紀 松野 行
　　野原 昌代 堀内 秀雄
古賀 英治先生(工芸美術)貪7・6・25
有山 長佑先生(工芸美術)貪7・6・25
丹羽 貴子先生(日本画)貪7・6・3
櫻田 久美先生(洋画・会員)7・7・29
高田 淑子先生(日本画・貪7・8・13
内藤 望山先生(書・会員)7・8・16
前田 泰昭先生(工芸美術)貪7・9・6
　　上原 利丸 古瀬 政弘
　　芳樹 山本 大悦